LIBRARY NEWS

（図書室だより）

令和６年５月17日 No.2
新座市立第三中学校
校 長　　石田　和男
図書整理員　名本　浩子

５月に入り、週の初めは雨、週の終わりは夏日の暑さという天候を繰り返しています。梅雨の入りには まだ早いと思いますが、５月中旬から下旬にかけて、梅雨を思わせるような、ぐずついた天気が続くことを、「走り梅雨」というそうです。これ以外にも、本格的な梅雨のほかに、「梅雨」のつく季節の言葉がたくさんあります。

３月から４月の菜の花が咲く時期に降り続く長雨のことを「菜種梅雨」、５月の前半のたけのこが育つ時期のしとしとと降る雨を「たけのこ梅雨」、夏の終わりから秋にかけての長雨は「すすき梅雨」と呼ばれ、秋と冬の境目に降る長雨は「山茶花梅雨（さざんか）」というそうです。「梅雨」だけでもいろいろな言葉があるのは、「雨」は生活に大きく関わるものであり、日本特有の季節の変わり目に、「雨」を身の回りの自然と結びつけて名付けた、日本人の雨に対する繊細（せんさい）さの表れではないでしょうか。

言葉に「五月」の入った「五月雨（さみだれ）」は、俳句などにも多く詠（よ）まれていますが、旧暦（きゅうれき）の５月、だいたい現代の６月に降る長雨のことで、梅雨を指しています。しかも、言葉としての出現は「五月雨」のほうが「梅雨」よりも古く、「古今和歌集」の時代には使われていて、一方、「梅雨」は、近世中期以降、俳諧（はいかい）から一般に使われるようになったそうです。

気象庁が発表した１カ月予報によると、この先、１カ月も暑さと雨が多い傾向だそうです。暑くもなく、寒くもなく、外に出るのも快適な季節なのに、雨が多いのは少し残念な気がしますが、そんな雨の日には、図書室で雨音を聞きながら読書はいかがですか。「雨」がつく言葉について、どれだけの言葉があるのか、また、それぞれの意味の違い、言葉の出現や語源について調べてみるのもおもしろいと思います。

さて、先月、４月１０日に、「全国書店員が選んだ いちばん！売りたい本 ２０２４年の本屋大賞が発表されました。大賞は、宮島未奈さんの『成瀬は天下を取りにいく』（新潮社）です。

主人公、成瀬あかりは、滋賀県大津市生まれ。他人の目を気にすることなくマイペースに生きている。いつもスケールの大きなことを言い、目標を達成させるための行動力がすごい。閉店することになった百貨店に毎日通い、中継に映ったり、「お笑いの頂点を目指そうと思う」と言ってＭ－１に挑（いど）んだり、髪の毛は１カ月で１cm伸びるということを検証するために丸坊主にしたり……。

将来の夢は、二百歳まで生きること。読んでいくうちに、読者は、全力で我が道を突き進む成瀬に惹（ひ）きつけられていく自分に気がつくことでしょう。

そこで、今年度の最初のクイズは、「本屋大賞」に関する問題です。今年で、本屋大賞は２１回目を迎えましたが、２００４年 第１回で栄（は）えある大賞を受賞した本は次のうちのどれでしょう。

① 『夜のピクニック』　恩田 陸/著
② 『博士の愛した数式』　小川 洋子/著
③ 『クライマーズ・ハイ』　横山 秀夫/著

歴代の本屋大賞 受賞作品は、図書室校舎側の書架の上に展示しています。どれもベストセラーになり、映画化された原作の本もあります。２０２４年の本屋大賞の受賞作品は、グラウンド側の特設コーナーに展示中です。図書室は、いつでもみなさんの「居場所」として、みなさんの来室をお待ちしています。

令和６年度　第７０回「青少年読書感想文全国コンクール」
中学校の部の **『課題図書』** が届きました！

「０類」の棚
カウンターに
展示中！

令和６年度、第７０回「青少年読書感想文全国コンクール」の中学校の部の『課題図書』を紹介します。

『ノクツドウライオウ 靴ノ往来堂』 佐藤まどか/著

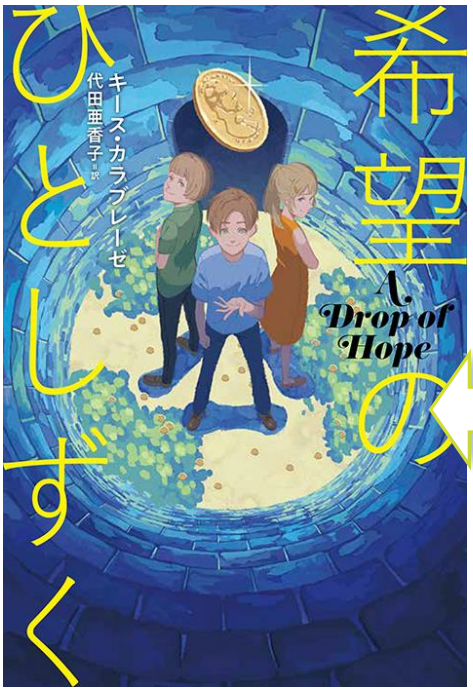
（あすなろ書房）

100 年続く老舗靴店、「往来堂」。店頭の鉄の古い看板には、横書きで「ノクツドウライオウ」とある。その店で見習いをしていた兄が突然、家を出ていってしまった。兄と同じ、４代目の孫である夏希は、「自分が手作り職人のおじいちゃんの跡を継ぐべきか。でも、自分は、シューズデザイナーになりたい。」と思い悩む日々。

そこへ、クラスのイヤミ男、宗太がやってきて、店を見学したい、靴屋になりたいと言う。

「目ざすはお客さんの笑顔。あんなふうに喜んでもらえるような、歩きやすくて、カッコ良くて、かわいくて最高の一足を作りたい」

まだ、自分のことでせいいっぱいで、オーダーメイドの良さも理解できていない夏希が、少しずつ周りの良さを理解し成長していく。そんな夏希を応援しながら読んでいると、自分も前向きになれる作品です。



『希望のひとしずく』 キース・カラブレーゼ/著

代田 亜香子/訳　（理論社）

「魔法、魔法、魔法！」この町で、ふしぎなことが起きている。『トンプキンス井戸』は、コインを投げ入れ願いごとをすると、願いがかなうらしい。「友達がほしい」転校生のウィンストンは、乱暴で嫌われ者のトミーと大の仲良しに。ペイジの弟、セスが勉強できないのは目の病気が原因だとわかり、セスは字が読めるように。三人の中学生、アーネスト、ライアン、リジ―は、それらの願いごとを知っている。

アーネストは、祖父の亡くなる直前に、自分の死後、屋根裏部屋の整理をするように頼まれた。祖父の死後、おそるおそる入った部屋でみつけた「おもちゃの山」。このおもちゃが願いをかなえるカギになる！？

人の幸せを願う、小さな思いやりの積み重ねからパワーが生まれて、奇跡みたいにすてきなことが起きるかもしれない。そんなことを思わせてくれる、ワクワクして、あたたかくてやさしい物語。

『アフリカで、バッグの会社はじめました

寄り道多め仲本千津の進んできた道』**江口 絵理/著　さ・え・ら書房**

「人の命を救う仕事がしたい」

医者になることをあきらめ、銀行に就職したが、自分のやりたいことではなかった。夢をあきらめたり、願いがかなわなかったり。それでも、自分のやりたいことを追求して、アフリカのウガンダでアフリカンプリントと出会った。

貧困に苦しむウガンダの女性を一方的に支援するだけではなく経営者も生産者を頼り、互いに尊重しあえる関係。

『「こうありたい自分」を大事にしてほしい。』『自分らしく輝く自分になろう』という千津さんからのメッセージが伝わってきます。